Ⅱ期一般入試

2015年実施

平成27年度　入学試験問題

国　語

（50分・100点）

受験番号		氏名	

注意事項

① 監督の指示があるまで中を開けないこと。

② 解答は、全て「解答用紙」に記入すること。

※ 字数制限がある問題は、句読点・記号も字数に含む。

③ 質問（印刷不明のところ）がある、鉛筆などを落とした、トイレに行きたくなった、気持ちの悪くなった、などの場合は静かに手をあげること。

④ 携帯電話は、音が出ないよう電源を切るかバッテリーをはずし、カバンにしまっておくこと。

名古屋経済大学市邨中学校

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

子どもの頃(ア)、「道草をしてはいけません」とよく言われたものである。学校から家に帰るまで道草をせずに、まっすぐに帰るようにと言われる。しかし、子どもにとって道草ほど面白いもの(イ)はなかった。落葉のきれいなの(A)を見つけるとヒロって友人と比べっこをしたり、蟻の巣を見つけて、そのあたりで働く蟻の様子(オ)を見てみたり。それに何よりも興味があったのは(カ)「近道」である。大人の目(キ)から見ると、それは迂路であり道草にすぎないのだが、何とか「近道」を見つけて、どこかの家の裏庭(b)にはいりこんだり、時には畠を踏みつけたと怒られて逃げまわったり、まったくスリル満点の面白さであった。

今から考えてみると、このような道草によってこそ、子どもはツウガ(c)クロの味を満喫していた、と思えるのである。道草をせず、まっすぐに家へ帰った子は、勉強をしたり仕事をしたり、①マジメに時間をすごしたろうし、それはそれで立派なことであろうが、道の味を知ることはなかったと言うべきであろう。

ある立派な経営者で趣味も広いし、人情味(d)もあり、多くの人に尊敬されている人にお会いして、どうしてそのような豊かな生き方をされるようになりましたかとお訊きしたら、「②結核のおかげですよ」と答えられた。

学生時代に結核になった。当時はテキカク(e)な治療法がなく、ただ安静(f)にするだけが治療の手段であった。結核という病気は意識活動の方は全然おとろえないので、若い時に他の若者たちがスポーツや学問などにいそしんでいることを知りつつ、ただただ安静にしているだけ、というのは大変なクツウ(g)である。青年期の一番大切な時期を無駄にしてしまっている、という考えに苦しめられるのである。

ところが、自分が経営者となって成功してから考えると、結核による「道草」は、無駄ではなかったのである。無駄どころか、それはむしろ有用なものとさえ思われる。そのときに経験(h)したことが、今になって生きてくるのである。人に遅れをとることの悔しさや、誰もができることをできない辛さなどを味わったことによって、弱い人の気持がよくわかるし、死について生についていろいろ考え悩んだことが意味をもってくるのである。

このような生き方の道として、③目的地にいち早く着くことのみを考えている人は、その道の味を知ることがないのである。受験センソウ(i)とやらで、大学入試が大変であり、ここでは大学合格という「目的」に向かって道草などせずにまっしぐらに進むことが要請されているようである。しかし、実際に入学してきた学生で、入学してから頭角(j)をあらわしてくるのを見ていると、受験センソウの間に、それなりに結構「道草」をくっていることがわかるのである。そんなことあるものか、と思われそうだが、このあたりが人間の面白いところで、道草をくっていると、しまったと思って頑張ったりするから、全体としてあんがいつじつまの合うものなのである。

こんなことを考えたのも、実は④漱石の『道草』を読み直す機会があったからである。読んで筋道を知って居られる人も多いだろうが、主人公の男性は、何かと奥さんとすれ違いをし、腹をたてたり悔んだりしている。そこへ、昔世話になった養父というのが現われて金をせびりに来る。こんなのに今更かかわり合う筋合いではないとわかっているのだが、何

となくかかわり合ってしまって、いやだいやだと思いつつ、関係を引きずってゆく。奥さんから見れば、ちゃんとけじめをつければいいのに、ということになるし、それが正しいこととわかっていながら、何のかのと厄介なことが続く。

これは、日常、どこの家でも見られるゴタゴタがただ淡々と描かれているだけのようにさえ思われる。主人公の男性は学者であり、学問的にしなくてはならないことを沢山かかえこんでいながら、このような日常のゴタゴタで「道草」をくわされてしまっているのだ。

ところが、この『道草』を読んでいると、⑤そのような現実をじっと眺めている、高い高い視点からの「目」の存在が感じられてくるのである。それはまったくたじろがずに、すべてのことを見ようとしている。自分が正しいのか妻が正しいのか、などという判断を超えて、現実をそのままに見ている。そのような目の存在を感じると、『道草』に描かれている日常のいわゆるゴタゴタなるものが、まさに「道」そのものの味をもっていることがわかってくるのである。

道草によってこそ⑥道の味がわかると言っても、それを味わう力をもたねばならない。そのためには漱石の『道草』ほどまでにはいかないとしても、それを眺める視点をもつことが必要だと思われる。

（河合隼雄『こころの処方箋』）

問一　〰〰線部**a**から**j**について、漢字はその読みをひらがなで書き、カタカナは漢字で書きなさい。

問二　═══線部**A**「の」と同じ用法の「の」を、文章中にある═══線部**ア**から**キ**までの中から一つ選んで、そのかな符号を答えなさい。

問三　①マジメについての説明を次の一文に表した。空らんに当てはまる言葉として、最も適当なものをあとの**ア**から**エ**までの中から一つ選んで、そのかな符号を答えなさい。

「真面目」であることは立派なことであるが、あえて「真面目」をかたかな表記にすることで、道草をすることの［　　］を強調している。

ア　豊かさ　　**イ**　悔しさ　　**ウ**　面白さ　　**エ**　辛さ

問四　②結核のおかげとあるが、それはどういうことか。説明しなさい。

問五　③目的地にいち早く着くことのみを考えている人とは具体的にどういう人か。適当でないものを次の**ア**から**エ**までの中から一つ選んで、そのかな符号を答えなさい。

ア　無駄を省く人
イ　効率を重視する人
ウ　計画的に勉強する人
エ　何事も一番が良いと考えている人

問六　④漱石とは夏目漱石のことだが、彼の作品として正しいものを次の**ア**から**オ**までの中から二つ選んで、そのかな符号を答えなさい。

ア　坊っちゃん　　**イ**　羅生門　　**ウ**　銀河鉄道の夜

エ　トロッコ　　**オ**　吾輩は猫である

問七　⑤そのような現実とあるが、「現実」を具体的に表している七字を文章中よりぬき出して、答えなさい。

問八　⑥道の味がわかるとあるが、その内容として正しいものを次の**ア**から**エ**までの中から一つ選んで、そのかな符号を答えなさい。

ア　人生という道を「近道」することで、人生の苦楽がわかる。

イ　高い視点からの「目」が、現実を見て、映ったものを受け入れている。

ウ　「道」とは「剣道」や「書道」の「道」で、人生の生き方を示している。

エ　高い視点からの「目」が、現実を正しく判断し、人の生き方を示している。

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

雨の多いキセツがやってきた。

グラウンドが使えない日には、練習は理科室や音楽室などのある特別棟と呼ばれる校舎内での走り込みになることがフえた。最近、部活動にスガタを見せないBチームの選手が数人出てきた。とくに目立つのが桜ヶ丘FC出身の左利き、市原和樹。和樹が部活動にスガタを現さなくなったのは、同じクラブ出身の遼介にとって①気がかりだった。

中学生になると和樹は少し変わった。背が高くない和樹は、昔から虚勢を張るようなところがあったけれど、根はとても優しいはずだった。小学生時代、当時監督だった峰岸に遼介が怒鳴られ続けたときもそうだった。練習からの帰り道、落ち込んでいる遼介の隣で、和樹は峰岸監督の悪口を並べ立てていた。自分の代わりに言ってくれている気がした。そんな和樹だったが、最近はどこかイライラしている様子で元気もなかった。悪い仲間とつるんでいるわけではなく、望んで嫌われ役でも演じるように［A］、いつもひとりでいることが多かった。

その日は天気がよかったにもかかわらず、大会終了後の練習に②緊張感がないという理由で走り込みになった。クラブチームに大敗したことがチームに尾を引いていた。三年生は走り込みだけでなく、筋力トレーニングにさらに力を入れていく方針を採るようだった。キャプテンの兵藤は、Bチームの一年生にも、同じように校舎の周りを十周走るように命じた。

「こういうときだけ、おれたちも平等なんだよな」

Bチームの沢村が後ろでささやく。

「サッカー部なんだから、せめてドリブルでいかせてほしいよ」

浅野もうなずいたあとで、つぶやいた。

ただでさえボールに触る機会が少ないBチームの選手たちの中には、陰で不平を鳴らす者がフえていた。

「いいか、おまえらが三年生になったときは、おれたちを越えていけるようにしろ」

兵藤が先頭を切って走りだした。

顧問の湯浅が白衣のポケットに両手を入れてグラウンドを見下ろす階段に立っていた。

一年生と三年生は同時にスタートを切った。遼介は兵藤になんとか食らいついていこうとした。持久力にはもともと自信があった。小学生の頃に、遼介は持久系、星川はスピード系と評されたりした。③もちろんうれしくもなかった。小学生の頃は足が速い者が誉められ、グラウンドを走り回る汗かきは、認められる場面が少なかった。

モチベーションの低い一年生は、［B］走っている者が目立った。

「どうした！」

兵藤が周回遅れの選手を追い抜くたびに、声を荒らげた。

遼介は懸命にその背中を追った。

校舎周り十周走の順位は、一位がキャプテンの兵藤、二位にフォワードの森崎、三位に遼介が食い込んだ。青山巧は最後に追い上げ、六位まで順位を上げた。土屋も八位につけた。三年生の中にも力を抜いて走っている者がいたようだ。吉井と足が速いはずの兄の片岡が、下位に終わっていた。

「順位が十一位までは合格。それ以下は当分の間、毎日走り込みだ」

選手を集めると兵藤が［C］言った。怒りが沸騰している様子だった。
「なんだよ、そういうことなら最初から言ってくれよ」
十二位以下に終わった片岡の不満の声が漏れる。
「片岡、おまえ少しくらい足が速いからって、いい気になるな」
そう言ったのは、グラウンドに降りてきた湯浅だった。
背後から声をかけられた選手たちが、湯浅のほうを見た。
「いつも全力で練習に打ち込めないようなやつは、本番の大事な試合で力を出し切ることはできないんじゃないか。サッカーって、そんな甘いものなのか」
湯浅の言葉に、［D］片岡はうつむいた。
「おまえらの練習態度と持久力はだいたいわかった。この先の大会は甘くないぞ。三年生はそれを知っているはずだ。走れないやつは戦えない。十二位以下は、兵藤の指示にしたがって持久力を高める努力をしなさい」
「今日来ていない和樹はどうしますか？」
一年生の土屋の声だった。
余計なことを言うな、と遼介は思ったが、やはり湯浅を怒らせることになった。
「そんなやつのことは知らん。おまえらで考えろ」
湯浅はそう言うと、職員室へもどっていった。④いつも穏やかな湯浅が、サッカーについて感情を露わにしたのを遼介は初めて見た。
グラウンドでは三年生の最後の大会に向け、AチームとBチームの扱いが色濃く出るようになっていた。Bチームの選手の練習試合への出場機会は格段に減っていた。一年生の中には、⑤部活動へのモチベーションを保てなくなってきている者がフえていた。練習の厳しさがますと、さらに拍車をかけた。そんな一年生に対して、三年生が怒鳴り声を上げる場面もあった。
和樹は論外だったが、浅野は朝の練習に遅刻するようになってきたし、霜越と甲斐は一緒に夕方の練習をサボることがあった。
その日、放課後の練習が終わると、和樹の話になった。
「和樹のやつ、今日も来なかったな」
哲也がなにげなくつぶやいた。
一年生たちは三年生がまだ部室を使っていたので、部室前の体育館のコンクリート階段で着替えをしていた。
「あいつ、最近、駅前でブラブラしているらしいぞ」
長塚ジュニアーズ出身の丸刈り頭の土屋が言った。
「駅前で、いったいなにしてんの？」
巧が青色のストッキングを脱ぎながら首を傾げた。
「あんなやつ、どうでもいいじゃん」
兄に似たパサついた髪を掻きむしりながら、［E］片岡が口を挟む。
「最近おかしなのが多いから、からまれたりしたら、厄介だぞ。一応あいつも桜ヶ丘中のサッカー部員だからな」
土屋は醒めた口調で言った。
哲也が言う。「湯川、おまえB組だよな。和樹はどうなんだよ？」
「知らん。あいつ、最近、帰りのホームルームが終わると、さっさと帰るし……」
湯川は上目遣いで、警戒するように早口でしゃべった。
「ふうん、遊びまわっているのか？」

遼介が訊(き)いた。
「なんか、駅前のゲーセンとかに、よくいってるみたいだよな」
「やっぱり早いとこ、もどってくるように声をかけたほうがいいな」
哲也が真面目(まじめ)な顔で言う。顎(あご)の下に先輩(せんぱい)の守田(もりた)からもらった使い込んだキーパーグローブを挟んでいた。
「あいつ、練習試合でもあまり試合に出られないんで、愚痴(ぐち)ってたよな」
シゲが言う。「あれで、なにか、短気なところもあるからな」
⑥「誰か言ってやれよ、桜ヶ丘のやつらがさ」
土屋が言う。土屋は長塚ジュニアーズ時代にはチームのキャプテンだった。チームでは小柄(こがら)だったが、霜越と甲斐と一緒にディフェンスラインを組んでいた。ディフェンスの統率(とうそつ)能力はなかなかのもので、指示の声もしっかりしている。キャプテンをやっていたせいか、リーダーシップも持ち合わせているようだった。
元桜ヶ丘FCのメンバーはみんなで顔を見合わせた。不思議とチームには、まだ桜ヶ丘FC出身者と長塚ジュニアーズ出身者という目には見えない垣根(かきね)が残っていた。その垣根を取りはずすには、もう少し時間がかかりそうだった。
「わかったよ、おれが言ってみるよ」
遼介は自分を見ている哲也とシゲに向かって言った。
「そうだな、それがいいんじゃないか」
元長塚ジュニアーズの霜越が言うと、隣で同じく甲斐もうなずいている。
片岡だけは、あまり興味なさそうに帰りの準備をひとり急いでいた。
（はらだみずき『サッカーボーイズ13歳』）

問一　〰〰線部**a**から**e**について、漢字はその読みをひらがなで書き、カタカナは漢字で書きなさい。

問二　文章中の空らん**A**から**E**に当てはまる言葉として正しい組み合わせを、次の**ア**から**エ**までの中から一つ選んで、そのかな符号を答えなさい。

ア
A　刺々(とげとげ)しく
B　だらだらと
C　面倒(めんどう)くさそうに
D　ばつが悪そうに
E　にらみつけるようにして

イ
A　刺々しく
B　だらだらと
C　にらみつけるようにして
D　ばつが悪そうに
E　面倒くさそうに

ウ
A　にらみつけるようにして
B　だらだらと
C　面倒くさそうに
D　ばつが悪そうに
E　刺々しく

エ
A　にらみつけるようにして
B　面倒くさそうに
C　刺々しく
D　ばつが悪そうに
E　だらだらと

問三　①気がかりだった とあるが、その説明として最も適当なものを次の**ア**から**エ**までの中から一つ選んで、そのかな符号を答えなさい。

ア　Bチームである和樹が、元気もない様子でひとりでいるのが多いこと。

イ　Aチームであるにもかかわらず、和樹が練習試合に出られないことを理由に部活に参加しないこと。

ウ　和樹が部活に参加しなくなった理由が、遼介の行動に原因があったのかも知れないと心配になったこと。

エ　和樹が部活に参加しなくなった理由が、雨の多い時期になりイライラしているからだと心配したこと。

問四　②緊張感がない とあるが、その理由を答えなさい。

問五　③もちろんうれしくもなかった とあるが、その理由を答えなさい。

問六　④いつも穏やかな湯浅が、サッカーについて感情を露わにしたのは、選手たちのどんな様子が原因と考えられるか。答えなさい。

問七　⑤部活動へのモチベーションを保てなくなってきている者 とあるが、それはなぜだと考えられるか。その説明として最も適当なものを次の**ア**から**エ**までの中から一つ選んで、そのかな符号を答えなさい。

ア　三年生ばかりが試合に出て、一年生は全く出られないから。

イ　練習試合であっても一年生の出場機会が格段に減ったから。

ウ　三年生が真面目に取り組む一年生を怒鳴るから。

エ　厳しい練習を重ねても試合に勝てないから。

問八　⑥「誰か言ってやれよ、桜ヶ丘のやつらがさ」 とあるが、「やつら」と表現している理由を、文章中から「から」に続く形で十五字でぬき出して、最初と最後の五字を答えなさい。